

ニューヨークの日系人と天理教伝道 ④

おやさと研究所講師
尾上 貴行 Takayuki Onoue

2017年に設立40周年を迎えたニューヨークセンターは、現在、数多くの活動を行っている。これらの活動を支える上で大きな役割を果たしてきた、特につとめの勤修、おさづけの取り次ぎ、神殿ふしんに注目し、関係者の言葉から、そのセンター活動における背景や意義についてみてみたい。

つとめ

つとめは、天理教の救済と信仰実践において根幹をなし、日本のみならず世界中の教会や布教拠点でもつとめられているが、ニューヨークセンターでも、設立当初からつとめに対する真摯な姿勢が見受けられる。奥井俊彦氏（2代及び5代所長を歴任）の設立当初の述懐にその理由の一端がうかがえる。

一人の女性ははじめての参拝から引き続き毎月月次祭に欠かさず参拝されるようになりました。おつとめが終わるとすぐに帰られてしまい、ゆっくりとお話もさせていただけなく申し訳ないと思ひ、数カ月経ってお祭り以外の日に来て頂いてゆっくりお話をさせていただこうと、連絡を取り来て頂きました。マンハッタンに住む画家さんで大学でも教えておられる方でした。まず、毎月参拝して頂くのにゆっくりお話も取り次げず申し訳ないと謝りましたところ、「私は毎月このおつとめに参拝することをとても楽しみにしています。マンハッタンでの殺伐とした生活の中で、月一回このおつとめに合う事により心が和み、どれ程癒されるかわかりません。」と。当時のニューヨークセンターの月次祭は、参拝者もさほど多くおつとめを勤める奉仕者の服装もまちまちで、…教会の子弟が大半でしたが、つとめる態度もなあなあとといった感じのおつとめでした。そんなおつとめでさえ、このように感じて毎月楽しみに参拝して下さる方がいらっしやることを知り、おつとめの意義をあらためて認識させていただいたことと同時に、教祖に対し申し訳なさで深くお詫びをいたし反省しました。（奥井2007年、4頁）

こうしてニューヨークセンターでは、つとめ方の改善、地歌の練習、神殿と参拝場の整備などが徐々に進められていった。

さづけ

教祖が世界たすけの手段として与えられた病気救済のおさづけの取り次ぎに関しても、ニューヨークセンターでは積極的な実践がみられる。深谷忠政氏のおたすけ活動がその一つの大きな経緯になったと考えられる。その様子を、奥井俊彦氏は以下のように述懐している。

「わしはなあ、どうしたらアメリカに道を広める事が出来るかなと色々な事やってみたけど、何十年通ってやってみて、やっぱりこれしかないと思ったのは、おさづけ。これしかないということやったな。」（深谷忠政本部員の言葉、筆者註）。……4月頃（1987年、尾上註）だったと思うのですが、ニューヨークセンターにファックスが届きました。「本年6月にニューヨークにおたすけに行きたいと思ひます。お世話取り、よろしくお願ひします。スケジュールは、追って連絡します。深谷忠政」これをかわきりに、深谷先生のニューヨークおたすけ布教が10年間に渡り40数回続きました。……私の心に今でも鮮明に焼きついているお話があります。……

「なあ奥井君、キリスト教は二千年もの歴史がある。でも、あれも元はエルサレムという地中海沿岸の片田舎で始まったものや。が、その当時の世界の都、中心はローマやったんや。そこでキリスト教の布教師は皆、ローマを目指して布教したんや。でも殺されたり、諦めたりして布教師は皆、引き上げてしまった中に、ペドロという若い布教師がいて、最後彼が一人、踏ん張ったんや。そして道はローマに着き、やがてそこから世界に広まっていったんや。それを思うと天理教はまだ160年程の歴史や。今、世界の経済、文化の中心はここニューヨークや。ニューヨークに道がつかんと道は世界に広まらんや。あんた達はな、今は一人でも多くの人の魂におさづけを取り次いでくれ。そしたらその魂は、いつか必ず神様がおさづけに引き寄せて下さるんや。焦らず一人でも多く人におさづけを取り次がせてもらうんや。ニューヨークに道がつかんと世界に道は広がらんや。あんたペドロになつてくれ。」（奥井2004年、4～7頁）

神殿ふしん

ニューヨークセンターの神殿は、1987年の設立10周年の際、記念事業として神床と参拝場が拡張された。そして設立30周年に向けて、森下敬吾4代所長によって神殿ふしんが打ち出され、2008年に現在の神殿が完成した。このふしんに関して、天理教海外部北米・オセアニア課の一瀬孝治課長（当時）は次のように述べている。

まずこの神殿普請で私が一番驚き、また感激しましたことは、現地教友の方々のニューヨークセンターに対する「つくし・はこび」、特に普請に対する御供（普請丹精金）です。……当初の目標であった50万ドルを遥かに超え、倍の100万ドルをも超えたというのは本当にすごいことだなと思わずにはおられませんでした。これは森下敬吾所長（当時）を始め皆様方の普請に対する思いが次第の一つになり、強固な「本気モード」となって進み出した結果だと私は思っております。私はこの意味は非常に大きいと感じています。お道の教理の中で人に説くのが非常に難しい一つは「おつくし」だといわれています。まして日本以上に個人の生活状況が全てお金で計られていると思われる経済至上主義のアメリカで、それぞれの教友が金銭的な余裕などない中で少しでも普請金にとつくされる姿は、非常に尊いものと言わざるを得ません。更に自らの御供のみならず、ある教友が未信者へのおたすけ先で生きたお金の使い方をといたところ、数万ドルをポンと御供下さった方がおられたというお話を聞かせて頂いたときに、それができたのはおたすけ人の誠実が伝わったればこそだろうと思うと、今回の不思議普請の進み方にただただ敬服し感謝するのみでありました。（一瀬2009年、9頁）

[参考文献]

- 一瀬孝治「センター神殿普請を通して感じたこと」『せいじん』2009年1月号、Vol.348、9～11頁。
- 奥井俊彦「9月月次祭神殿講話」『一れつ』2004年10月号、4～8頁。
- 奥井俊彦「4月月次祭神殿講話」『一れつ』2007年5月号、4～8頁。